

1 はじめに

昭和40年代に毎週テレビで放送されていたなつメロ番組と言えば、東京12チャンネル（現・テレビ東京）制作・放送の「なつかしの歌声」と、読売テレビ制作・日本テレビ系列放送の「帰ってきた歌謡曲」が代表的な存在として挙げられる。これら二番組の放送記録については、林田雄一氏が「なつかしの歌声」、筆者が「帰ってきた歌謡曲」をそれぞれ担当し、共同作業を経て令和2年（増補改訂版は令和4年）に同人誌としてまとめ上げた『東京12チャンネル（現：テレビ東京）「なつかしの歌声」放送全記録《増補改訂版》』及び『よみうりテレビ（読売テレビ）「帰ってきた歌謡曲」放送全記録《増補改訂版》』。

今回本書で取り上げるのは、NETテレビ（昭和52年4月より“テレビ朝日”に呼称変更）が制作し、同系列局にて昭和46年10月から昭和53年3月まで、一部休止期間を除き毎週放送された「にっぽんの歌」である。『週刊TVガイド』昭和46年10月1日号では、新番組として「にっぽんの歌」を「第3の“なつメロ番組”が登場」との見出しにより次のように紹介している。

NHKの恒例となった“なつメロ特集”や東京12チャンネルの「なつかしの歌声」といった昔なつかしい歌番組がブームを呼んでいるが、この人気に目をつけたNET・毎日・中京・KBCテレビも十月一週からなつメロ歌手総出演による「にっぽんの歌」を登場させ、“懐メロブーム”に便乗する。

これは同社で放送してきた「ヒットで勝負」や「9時のビッグヒット」が若い層を対象に放送してきたが、「フォー・リーブス」が出演しても視聴率が上がらないのに、“なつメロ歌手”が出ると意外に好評。九時台はやっぱり若い人よりも三十代から四十代の主婦層がチャンネルを握っていることが、いままでのデータでわかりました（広報部・鳥山番組担当者）と、なつメロ歌手総出演による「にっぽんの歌」の放送となったもの。

出演する歌手は「ディック・ミネ、東海林太郎、渡辺はま子ら“なつメロ歌手を総ナメ”（スタッフ）する」。一方で、なつメロを歌って受けている鶴田浩二、森進一、水前寺清子、藤圭子など人気歌手も出演させることになっている。

司会は加東大介と山東昭子。

この記事では「帰ってきた歌謡曲」への言及こそないものの、「なつかしの歌声」を第1、「帰ってきた歌謡曲」を第2のなつメロ番組と位置づけた上で、「にっぽんの歌」をそれに続く第3の存在として捉えていたものと思われる。

また、『週刊平凡』昭和49年1月31日号には、「テレビでは見られないベテラン歌手の秘話」（副題：「なつかしの歌声」を司会するコロムビア・トップと“なつメロ”番組スタッフ座談会）と題する記事が掲載されているが、その記事では、「なつかしの歌声」「帰ってきた歌謡曲」「思い出のメロディー」（NHK）と並んで、「にっぽんの歌」の番組スタッフも座談会の参加者として名を連ねており、この記事からも「にっぽんの歌」がなつメロ番組の一つとして認識されていたことが伺える。

本書では、“第3のなつメロ番組”とされた「にっぽんの歌」が、先行する「なつかしの歌声」や「帰ってきた歌謡曲」と比較してどのような特徴を持っていたのか、更に、昭和

40年代後半から50年代前半という時代状況の中で、この番組が“なつメロ”をどのように取り扱っていたのかを、放送記録の作成を通して解き明かしていきたい。

調査に当たっては、主として放送期間中の各新聞に掲載されたテレビ欄の記述を参照した。また、国立国会図書館の音楽・映像資料室に、放送初期の回を中心とした同番組の台本が25回分所蔵されており、これらも併せて参照した。放送初期においては、新聞のテレビ欄で放送内容が紹介される頻度が少なかったため、これらの台本は初期の放送内容を把握する上で大きな助けとなった。